

ノーサイド

北原 巖 男

給付型奨学金を通じて修学を支援し続け、各方面に有為な人材を多数輩出して来ています。その数は、今春卒業が見込まれる第44期奨学生を含めると、総計1万71名になります。

現在の「公益財団法人古岡奨学会」の理事長は、「株式会社学研ホールディングス」社長の宮原博昭さん。宮原博昭さんは、防衛大学校の卒業生です。現在、「公益財団法人防衛大学校学術・教育振興会」(理事長・岡崎 匠さん)の評議員も務められ、母校の発展にも尽力されています。

この度、同古岡奨学会から第44期奨学生360名の手記をまとめた文集「奨学」第44号が発行されました。詩人の金子みすゞさんではありませんが、卒業を控えた「みんながってみんないい」皆さんの思いや心情の吐露に、おのずと引き込まれます。

ここでは、その中から2名の奨学生の手記を、自衛隊員・ご家族の皆さんそして本紙読者の皆さんと共有させて頂きたいと思えます。(筆者抜粋)

1. 「迷いと決意」 愛媛県的女子奨学生
「私の将来の夢は動物園の飼育員になることです。小学生の頃から動物と仲良くなれる仕事にあって、動物が本来持つ力や性格を活かし、その生き様を人に魅せられるような動物園をつくりたいです。将来、動物にとっても人にとってもより良い動物園をつくれる飼育員になるために、展示の仕方や野生動物の住む環境、絶滅危惧種の保護や繁殖など、幅広い学び、知識と経験を積んでいきます。現れ人を襲う事件が増えて、感謝を忘れず、応援してあげたいと思ってもらえるように、動物園という場で、努力を続けます」。

2. 「母の魔法」 福岡県的女子奨学生
「私の母は魔法が使えるのかもしれない。…ここで私は、母が使える魔法と、もに日頃の想いを伝えた。包んでくれる。私は、何度でも母の前向きな言葉に支えられてきた。母が私にかけた言葉はすべて、私のお守りだ。最後は、私の気持ちや考えていることがわかる魔法だ。嬉しいとき、楽しいとき、悲しいとき、辛いとき、どんなときでも、母にはずっとそばにいてほしい。そして、その度に母は私を真正面から受け止め、向き合おうとしてくれる。いつも私のことを第一に考えてくれる母は偉大だ。自分のことで手が一杯な私も、いつかは母のようになりたいのだから。母の魔法にかけられる度に強くそう思う。」

奨学生の皆さんは、いずれもお母さんが右手一つで大変な苦勞をして育ててくれた「掌中の珠」と言っても過言ではありませぬ。これからもご家族を大切に、胸を張って、元気に活動されていくことを期待し、心から力いっばいのエールを送りたいと思います！(筆者は、2012年から同奨学会理事)

高校3年奨学生2名の手記

幼い頃父親を炭鉱の落盤事故で失い、女手一つ、母子家庭で育てられた「学研」創業者の(故)古岡秀人さんが、1980年に私財を投じて設立した「古岡奨学会」。

爾来、厳しい環境の中に在って向学心溢れる母子家庭の高校生に対する

この度、同古岡奨学会から第44期奨学生360名の手記をまとめた文集「奨学」第44号が発行されました。

詩人の金子みすゞさんではありませんが、卒業を控えた「みんながってみんないい」皆さんの思いや心情の吐露に、おのずと引き込まれます。

ここでは、その中から2名の奨学生の手記を、自衛隊員・ご家族の皆さんそして本紙読者の皆さんと共有させて頂きたいと思えます。(筆者抜粋)

1. 「迷いと決意」 愛媛県的女子奨学生
「私の将来の夢は動物園の飼育員になることです。小学生の頃から動物と仲良くなれる仕事にあって、動物が本来持つ力や性格を活かし、その生き様を人に魅せられるような動物園をつくりたいです。将来、動物にとっても人にとってもより良い動物園をつくれる飼育員になるために、展示の仕方や野生動物の住む環境、絶滅危惧種の保護や繁殖など、幅広い学び、知識と経験を積んでいきます。現れ人を襲う事件が増えて、感謝を忘れず、応援してあげたいと思ってもらえるように、動物園という場で、努力を続けます」。

2. 「母の魔法」 福岡県的女子奨学生
「私の母は魔法が使えるのかもしれない。…ここで私は、母が使える魔法と、もに日頃の想いを伝えた。包んでくれる。私は、何度でも母の前向きな言葉に支えられてきた。母が私にかけた言葉はすべて、私のお守りだ。最後は、私の気持ちや考えていることがわかる魔法だ。嬉しいとき、楽しいとき、悲しいとき、辛いとき、どんなときでも、母にはずっとそばにいてほしい。そして、その度に母は私を真正面から受け止め、向き合おうとしてくれる。いつも私のことを第一に考えてくれる母は偉大だ。自分のことで手が一杯な私も、いつかは母のようになりたいのだから。母の魔法にかけられる度に強くそう思う。」

奨学生の皆さんは、いずれもお母さんが右手一つで大変な苦勞をして育ててくれた「掌中の珠」と言っても過言ではありませぬ。これからもご家族を大切に、胸を張って、元気に活動されていくことを期待し、心から力いっばいのエールを送りたいと思います！(筆者は、2012年から同奨学会理事)

幼い頃父親を炭鉱の落盤事故で失い、女手一つ、母子家庭で育てられた「学研」創業者の(故)古岡秀人さんが、1980年に私財を投じて設立した「古岡奨学会」。

爾来、厳しい環境の中に在って向学心溢れる母子家庭の高校生に対する

この度、同古岡奨学会から第44期奨学生360名の手記をまとめた文集「奨学」第44号が発行されました。

詩人の金子みすゞさんではありませんが、卒業を控えた「みんながってみんないい」皆さんの思いや心情の吐露に、おのずと引き込まれます。

ここでは、その中から2名の奨学生の手記を、自衛隊員・ご家族の皆さんそして本紙読者の皆さんと共有させて頂きたいと思えます。(筆者抜粋)

1. 「迷いと決意」 愛媛県的女子奨学生
「私の将来の夢は動物園の飼育員になることです。小学生の頃から動物と仲良くなれる仕事にあって、動物が本来持つ力や性格を活かし、その生き様を人に魅せられるような動物園をつくりたいです。将来、動物にとっても人にとってもより良い動物園をつくれる飼育員になるために、展示の仕方や野生動物の住む環境、絶滅危惧種の保護や繁殖など、幅広い学び、知識と経験を積んでいきます。現れ人を襲う事件が増えて、感謝を忘れず、応援してあげたいと思ってもらえるように、動物園という場で、努力を続けます」。

2. 「母の魔法」 福岡県的女子奨学生
「私の母は魔法が使えるのかもしれない。…ここで私は、母が使える魔法と、もに日頃の想いを伝えた。包んでくれる。私は、何度でも母の前向きな言葉に支えられてきた。母が私にかけた言葉はすべて、私のお守りだ。最後は、私の気持ちや考えていることがわかる魔法だ。嬉しいとき、楽しいとき、悲しいとき、辛いとき、どんなときでも、母にはずっとそばにいてほしい。そして、その度に母は私を真正面から受け止め、向き合おうとしてくれる。いつも私のことを第一に考えてくれる母は偉大だ。自分のことで手が一杯な私も、いつかは母のようになりたいのだから。母の魔法にかけられる度に強くそう思う。」

奨学生の皆さんは、いずれもお母さんが右手一つで大変な苦勞をして育ててくれた「掌中の珠」と言っても過言ではありませぬ。これからもご家族を大切に、胸を張って、元気に活動されていくことを期待し、心から力いっばいのエールを送りたいと思います！(筆者は、2012年から同奨学会理事)

北原 巖男(きたはらい わお) 元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現日本東ティモール協会会長。(公社)隊友会理事